最後の1秒まで
きみが好きでした

一章

２０○○年　○月×日

友達が死んだ。

私がスラムに足を運ぶようになって最初に仲良くなった子。

その子は戦火の中、大好きな猫を探し家を飛び出し砲撃に巻き込まれ死んだ。今もその子が猫を撫でている様子が思い浮かぶ。

その姿がみたくてスラムに通っていた。大好きだったのに。もっと話したかったのに。その子のおかげで友達も知識も増えたし、夢ができた。その子に夢の話をしたら、ずっと応援してるって言ってくれたのが昨日。

その子の声がまだ頭の中に残っている。

今日は、大切なひとを亡くした日。

「起きろ。」

誰かの声で目が覚めた。窓からの光が強くて目が開かない。

「誰、ですか。」

狭い視界から声の方を見ると、知らない人が真顔で私を覗いていた。

「わあああ！？」

思わず飛び起きた。その人の身なりを見て、一瞬にして私の脳が、自分とは程遠い身分の人がこの部屋にいることを認識し、驚いた。。おそらく男だが、髪が長い。中性的でもある。身なりは「王族」しか着られない伝統的な装い。なぜこんなところにいるのだ。こんな奴隷の、ほったて小屋に。急いでベッドの上で身なりを整え、尋ねた。

「おそらくあなたは王族の方なのでしょうが、こんな汚らわしい場所に何のご用でしょうか。」

王族の男は真顔を崩さないが、一瞬こちらから目を外した。

「それは……おれの家に新しい奉公人が来たと言われたので確認しに来たまでだ。」

少し恥ずかしそうにそう言う彼をじっと見てしまう。

それに今、新しい奉公人と言った…？私のようなスラム出身奉公人が王族を担当するなんてありえない。なにかの間違いなのだろうか。

「…あなたが私の新しいご主人なのですか。」

「まあ主人ではあるが、厳密に言えばおれの父上が、直属の主人だ。」

よく見れば、私とあまり変わらないくらいの年に見える。少し大人びているが。

私が身体をじっと見すぎたのか、彼は少し恥ずかしそうな顔をし、私から目を逸らした。

「…なっ、何だ、おれがそんなに変か」

「あ、いや変などではなく、ただ、私と年が近そうだし、王族の方に仕えるなんて聞いておりませんでした。」

「おれは12だ。お前、誰からも何も聞いていないのか？」

仏頂面だった彼の表情が、少し綻んだ気がした。

王族や貴族はこの「スターダスト星」の支配層。平民なんかとは権力も待遇も財産も天と地の差。私のような奉公人は貧乏な平民の成れの果てだ。王族や貴族に売られ奴隷のようにいい様に使われる。しかし私は運がいい方だった。前主人は厳しい人で、普通の平民よりは幸せな生活は送れず窮屈な日々ではあったが、私を普通の平民同様に扱ってくれた。

新しい主人である彼の父が私をどう扱うかはわからない。身分の差は明白だが、なんだか少し彼とは差がないかのように感じる。

「なんだか不安そうな顔だな、何を考えているのだ」

そう言われると、不安な気持ちが心から溢れる。

「心配はいらない。この構えに誓って。」

彼は王家の身構えをし口を開いた。

「おれの名は『ミシェル・ダイナスティー』だ。ダイナスティー家長男であり、スターダストの教えを伝承し宙の藻屑となる一族の一人。両親の前以外ではミシェルと呼べ。」

知らない単語がたくさん脳内に吸い込まれる感覚。目の前で見知った身構えをする彼。

その光景がなんともカオスで、綺麗だと思った。数秒の沈黙のあと、私の自己紹介をしていないことに気がついた。

「私は本日よりダイナスティー家奉公人となります『マヤ』と申します。」

「お前のことはもう知っている。あと敬語でなくてもいい。」

「…なぜ知っているのですか、私のことを。」

私が言葉を言い終える前に、ミシェルは出口の方に歩き出した。そしてこちらに振り向く。

「父上から聞いたんだ。…早く起きて行くぞ。外で待っている。」

バタンと大きな音を立て、外に出てしまった。

早く支度をしないといけないのだが、情報量が多すぎるが故に体の動きが遅くなる。彼…ミシェルはなぜ私のところにわざわざ来たのだろう。私は奉公人なのに、やけに親しかった。他の人は私をごみのように扱うのだろうか。ダイナスティー家は王直属の一族なのだろうか。スターダストの教えとは。そんなことを考えながら、支度をした。

二章

ダイナスティー邸は、見たことがないくらい大きかった。
道中の貴族の豪邸とは比べ物にならないくらいだ。ロイヤルストリートの高所には王族の豪邸が集まっているのだが、その中でも一際目立っている。門の前に着き、ミシェルの右斜め後ろに付く。

「やっと追いついたか。入るぞ。」

息が切れていて口を開く余力がない。聞こえるか曖昧な返事をし、スタスタと歩くミシェルのあとを追った。
大きな門をくぐると草原のように広い庭。その中にポツンと小さな教会のような建物が立っていて、その奥の豪邸のドアは『宙』をかたどったかのような不思議な模様が彫られている。全て、今までに見たことのない異様なものばかりだった。
ドアの前に着き、私はドアノブがないことに気が付いた。

「あれ、ドアノブがない…入れませんね。」

「入れる。おとなしく見ていろ。あと両親の前以外では敬語ではなくてもいいとさっき言っただろう。」

「もうしわけ…あ…ごめん。」

ミシェルは満足げな顔を私に見せ、ドアの方に顔を向け直し、宙の模様に手を触れた。

『我、星とともに生き星とともに宙の藻屑となるものなり。』

ミシェルが何かを唱えると模様が眩しいくらい輝き、ミシミシとドアが開き始めた。私が口を開け呆気にとられている間にもミシェルは歩き始めた。

「あ、あの今のは…？」

「あれは王族に伝わる紋語だ。王族以外が覚えてはいけない。忘れろ。」

紋語…また聞いたことのない言葉だ。おそらく代々伝わる重要な言葉なのだろう。この人といると未知のものに触れることができていい。けれど、なぜ王族以外は覚えていけないのだろう。この星には、私の知らないことがたくさん隠されている。

ダイナスティー邸内は厳格な雰囲気に包まれていて、大聖堂のようだった。天井や壁、ステンドグラスの窓には玄関のドアと似たような模様がびっしりと彫られていて、ここだけ別世界のようだ。外の世界では意味のないような戦争が繰り広げられているのに、ここだけは平和で安心感に包まれている。

ふいに友達の顔が思い浮かんだ。あの子もここに来れば同じような気持ちになれただろうか。そういえばスラムは無事だろうか。私はここでこんな気持ちになっている場合ではない。こんなことを考え始めたら止まらなくなるのはわかっているが、頭が言うことをきかない。私が、何とかしなければ。

「マヤ。どうした？大丈夫か。急に座り込んだりして。」

気がついたら私は玄関で座り込んでいた。昨日のことを思い出して思考の悪循環となっていた。私の悪いくせ。

「顔色が悪いぞ。体調が悪いのか？嫌なことでもあったのか？」

「いや、なにもない。気にしないで。」

ミシェルは眉間に皺を寄せムッとした表情をした。そして仁王立ちのまま不貞腐れた声で言った。

「主人命令だ。答えろ。」

昨日のことを言わないと言わなければ進まない気がする。しぶしぶ言うことにした。

「実は昨日、……友達が死んだ。」

「…そうか、友人が。」

意外と淡白な返事が返ってきた。まぁ、他人の死を聞いて酷く悲しむ人なんて少ないだろうが。

「なぜ死んだ？」

「…戦争に巻き込まれた。」

私の一言でミシェルの表情が明らかに一瞬固くなった。しかしすぐに普通の表情に戻り、話し始めた。

「うむ…それは、残念だ。友人の命は宙の藻屑にならず、星に宿ることもないからな…。」

「…宙の藻屑、星に宿る？」

「ああ、おれはもう全てどうでもいいという感情になっているからな。お前を傷つけるような発言をするのは承知の上だ。…お前の友人はこの星が滅びる前に死んだから、星に宿ることなく力を持たず転生するだろう。幸福も約束されずに、な。」

この人は、何を言っているんだ。

おそらく大切だった友達が酷く言われてるのだろう。悔しくて嫌な気持ちが込み上がってくる。しかし、それ以上に、ミシェルの言葉一つ一つへの興味が勝ってしまっている。私は全てを知りたかった。この戦争の意味。生きている意味。この世の真理。何故かこの人といると、全てを知れる気がする。さっき会ったばかりなのに。

「何が何だか分からない様子だな。」

「だって、私の知らないことばかり言うから。」

「お前は全てを知りたい、そんな顔をしている。まだ欲求が残っているお前が羨ましい。おれは、おれたちは、あと一つの願いを叶え宙の藻屑となるだけの存在なのに。」

そう言い捨てるとミシェルは私に背を向けた。背を向ける前に一瞬見えたのは、遠くを見るような表情だった。

「そんなこと言うのには何か理由があるんでしょう？教えて欲しい。」

空気が変わったような気がした。冷たい、とても冷たい。

「これは誰にも、死ぬまで口外してはならない。」

「言わないよ。」

そうか、とミシェルは言い、再び私と向き合った。

「明日、この星は死ぬ。」

三章

星が死ぬ？明日？あまりにも突然すぎる終わりが信じられなくて、何か喋ろうとしても口が開かない。

「厳密に言えば今日の日付が変わる直前だ。」

そう言われても、驚きが変わるわけではない。整理もつかない。スラムにいる友達にまだ話したいことだってたくさんある。幸せだってまだ十分に与えられていない。

「…スラムの人たちには、もう会えないのかな。」

「父上次第だが、おれは会わせることくらいは許す。」

そういえば、まだミシェルのお父上…新しいご主人に会っていない。さすがにこれ以上待たせるわけにはいかない。

「じゃあ早く、ご主人さまのところにいかないと。スラムは後ででもいいから。」

「多分、父上はお前をそばから離さないだろう。だから、行くなら今のうちだ。遅れた言い訳ならおれがいくらでもする。」

「ご主人はなぜ見ず知らずの私を、もうすぐ星が死ぬのにも関わらず奉公人として引き取ってくれたの？」

普通もうすぐ全てが終わるのに奉公人を雇うなんてありえない。絶対に何か理由がある。それを聞くまで動きたくなかった。しかしミシェルは再び私の腕を引っ張った。

「おれは、お前の意思は叶えたい。だが父上は我が儘だからお前の意思でも聞かないだろう。それだけだ。」

私の疑問には答えてくれなかった。どうして、という感情が蔓延る。ミシェルの事情もあるのだろうが、隠されると気になって仕方がない。気がついたら門の外まで引っ張られていた。私はしぶしぶされるがままにスラムに向かうことになった。

「なんで私の質問にちゃんと答えてくれないの。」

「さっきの質問にはまだ答えられない。父上に強く念を押されているからな。他に質問で答えられるものがあるなら答えるが。」

「じゃあ、なんで星が今日死ぬのが分かるの？」

私が食い気味に出たのに驚いたのかミシェルは一瞬ひるんだように見えた。

「まだ信じきれていない様子だな。」

「うん。だって心の準備だってしてない。」

「普通そうだろうな。…まあ簡単に言うと『我々が計画したから』だ。」

星の滅亡を計画できるほどの力が王族にあるということなのだろうか。ミシェルはなんでそれを知ってる…?彼は、私の知っている王族じゃない。

困り果てた表情の私を見てミシェルはフッと笑い、同じ目線にしゃがんだ。

「おれが何者か知りたい顔をしてるな。」

なぜか声が出ず、ただ頷いた。

「おれは、おれたちは王族のトップ、いわゆるこの星の王を『崇拝』している。この星は『スターダストの教え』によって支配されていて、誕生から滅亡までのシナリオが決まっている。おれたちはこの星から生まれ、また宙の藻屑となることを使命に死にゆくのだ。」

ミシェルはその辺にあった平たい石に腰掛け、地面に分かりやすく図を描き始めた。

「まず、この教えは平民以下の者どもには知らされていない。」

「なぜ？」

「よく考えろ。そもそもこの世がシナリオで決められているなんて全員知っていたら混乱を招きかねない。まず我々王族貴族は、星と共に死に宙の藻屑となるのが最大の使命として生まれている。平民以下は、言い方が悪いが我々のシナリオの犠牲者でもあるのだ。ただ偶然この星に生まれた生命なのだ。」

地面に描かれた図からなぜか目が離せなくなっていた。こんな闇のような話がこの星に隠されていたなんて。いや、彼らにしたら闇などではなくただの当たり前にすぎないのだが。

「そして、星の滅亡の日に死ぬと魂が星に宿ると言われている。」

「それって、さっき言ってた星が滅亡する前に死ぬとどうなるか教えてくれた話の…。」

「ああ、お前の友人は宙の藻屑とならず星に宿ることもできず、転生後の幸福が約束されない。」

ミシェルが地面に描いた友人の顔にバツを描いた瞬間、ポロポロと涙が溢れた。私がそばから離れなければ、今頃生きていたかもしれない。

「スラムの人たちを幸せにしたいっていう思いは意味がないの？私はなんのために生きているの？」

ガシガシと地面を擦りバツのついた顔の絵を消し、ミシェルは私の頬を撫でた。

「お前のこころは暖かい。おれはお前が転生後の幸福を約束されるに値する存在だと誓おう。」

「でも、私だけ幸せになんかなれない。」

みんなの苦しむ姿が、声が頭に響く。この世界は、やっぱり理不尽だ。

「運命には抗えない。おれには王を止めることはできない。ただ、受け入れるしかないんだ。おれたちは、宙の藻屑になるために生まれてきたのだから。」

ミシェルの言動には、信仰からなる『洗脳』が垣間見える。もう生まれた時からこの思考が離れられないんだなと私なりに感じた。

「…全ては王が元凶？」

「まあそうなる。王は、転生後も王だ。実質不老不死のようなもの。王族や貴族も転生後は同じ身分であることが約束される。」

「星が死ぬ前に死んだ人達も私たちと一緒で転生後の幸せは約束されないの？」

「おれたちがしっかり星と共に死ぬことが出来れば、王族や貴族は転生後の幸せを約束される。」

反論する気にもならなかった。決められた人生を歩むことの辛さ。ミシェルは前世に幸せを約束されたのだろうが、今世のミシェルに幸せを感じられない。自分でも全てを諦めていると言っていたくらいなのだから。

ミシェルは、再び歩き始めた。星が死ぬまで、あと5時間。怖いけど、なぜだか取り乱すことはなかった。せめて、ミシェルと一緒に死ねたらいいのにと思った。

「もうすぐスラムに着くよ。…ミシェルはほんとに来たことないの？」

「家を抜け出すことはあるが、ここまで来たことは無い。」

「そっか。」

枯れ果てた林を超えるとそこにあるのがスラムで、もうすぐ着く頃に煙の匂いがするのが合図だ。しかし、今日はやけに匂いが強い。鉄の匂いと血の匂いが混ざったような、不快な匂いがする。ミシェルもさすがに気がついたようで、眉をひそめていた。

「この匂いはいつもしているのか？」

思わず走って林を抜けた。ミシェルが遠くで私の名前を呼んでいるのが聞こえたが無視した。

「え、なにこれ。」

林を抜けて見えたのはいつも見ているスラムなんてなにもない、荒廃した地面だった。

「…凄いな。」

追いついたミシェルが後ろでボソッと呟いた。

「みんなっ、みんなは？どこ？」

「おい、落ち着け。」

挙動がおかしくなった私をミシェルは服をつかみ抑えてくれた。

「ねぇ…何も無いよ…。」

ミシェルの身体を弱い力で叩いたが、ミシェルはただただ、その手を優しく受け止めた。

「…そもそも戦争を起こしたのは、滅亡するときの人口を減らし、星に宿る魂の数を減らすことで来世で力をもつ者の数を抑制するため。全てはスターダストの教えによるもの。おれには何もできない。」

膝が崩れた。この世界は、おかしい。辛い人は辛いまま死ぬ。幸せな人は幸せなまま死ぬ。私はなにもできないまま、死ぬ。きっとこの世の深淵にも触れられないまま、星とともに死にゆくのだ。

「知れるならこの世の真理も知りたかった。あわよくば私がこの星の王になりたかったの。そうすればスラムの人たちを幸せにできるかなって。でも無理みたい。」

「だからやけに情報を知りたがっていたのか。」

「日記も書いてたの。情報整理のためにね。でももう私じゃ無理ってわかった。もうみんないないし、生きる意味がなかったんだ。」

考えすぎてしまう悪いくせは結局治らなかったな、とうなだれながら考えたが、ミシェルは同じ目線に座って手を握ってきた。

「生きる意味ならある。」

そう言ったが頭を掻き、ばつの悪そうな顔をしている。

「…本当は絶対に口外してはいけないんだが、お前が生きる意味があったという事実を無駄にしてはいけないと思う。父上にはとても申し訳ないが。」

「なに、どういうこと?」

「結論から言おう。お前の中には王族の血が混じっている。」

「え…?」

スラム出身の私に王族の血が混じっているなんて有り得ない。なぜか、手が震える。ミシェルはじっと私の方を見ているが、私は彼を見れない。

「父上には二人の妻がいる。一人はおれの母上で正妻。もう一人は…お前の母親で、妾(めかけ)だ。おれは正妻である母上から生まれたのがおれで、父上が愛したもう一人の女性から生まれたのがお前だ。」

「じゃあなぜ私の母はずっとスラムにいたの?ミシェルの父上は王族だからロイヤルストリートで過ごすはず。」

「父上がスラムに赴いた時にお前の母親に一目惚れしてそのまま極秘で妾にしお前を産んだからだ。スラムの住人を王族にするのは、王が許さないからな。」

母に昔、なぜ私が生まれたのか聞いたことがある。『マヤが生まれたのは王子様みたいな人が迎えにきてくれたから。お別れしちゃったけどまた会いたい。』と言っていた記憶がある。ミシェルの父上…いや私の父上に会いたいという気持ちが湧いてきた。

「おれは最近それを聞かされ、妹がいると知った。でも明日おれも星も死ぬし、どうでもいいやと思ったが、お前に会って、久しぶりにちゃんとした感情が芽生えた気がする。」

「ちゃんとした感情って…?」

ミシェルは私の顔を見て少し口角を上げ笑い、私の腕を引っ張り元の道に連れ出した。

「死にたくない、正直。」

「なんか言った？」

「…なんでもない。」

星が死ぬまで、あと3時間。

最終章

ダイナスティー邸に着いた。しかし数時間前にきた時とは違った雰囲気になっていて、広い庭には貴族の中でも地位の高い人たちが集まりなにか話していたり、大きなドアの模様は禍々しくなっている。

道中、ロイヤルストリートに入ってからもおかしかった。空に向かって祈る人。酒を浴びるように飲んでいる人。王を讃えるようなことを叫んでいる人。…スターダストの教えでは星と共に死ぬことは名誉なことであるから、みんなお祭りのような、異様な雰囲気になっているのではと思う。

ミシェルが紋語を唱えドアが開いた瞬間、たくさんの人が飛び出してきた。

「…もう王のところに向かう時間か。…父上は!?どこだ!?」

ミシェルが突然叫び、人をかき分けどこかに行ってしまった。

「ミシェル待って!」

ミシェルを追いかけた。

人はみんな外に出て行ったからすぐに追いついた。そして腕を掴む。

「ミシェル、急に行かないで。」

「すまないが、時間がもうないんだ。父上に会わなければ。最後にお前に会わせたいのに。」

「なにが起きてるの？」

「スターダストの教えを信仰している者たちは、皆儀式をしてから星と共に死ぬ。父上もそこに行く。おれも行くことになるからきっと父上もおれを探しているはずだ。」

「なら早く探さないと！」

急いで階段を登り広い廊下にでると奥の部屋から身長の高い男がゆっくりと出てきた。そしてこちらをじっとみて、目を見開いた。男はゆっくりとこちらに近づいてくる。顔が見えてきた。あれは、絶対『父上』。

「…ミシェル。探したぞ。さあ行こう。」

父上はゆっくりミシェルの背中に手を添え、連れて行こうとした。

「！？父上、この人が分かりませんか、あなたの娘のマヤです！新しく奉公人とし」

バンッッッッ

乾いた音が響いた。何が起きたか分からなかった。ミシェルが床に倒れている。気がついたら足が動いていた。倒れたミシェルに触れようとしたが、父上が私を押しのけ、ミシェルを抱きかかえた。その振動でミシェルが目を覚ました。

「ミシェル。あんな見知らぬものと遊んでいたのか。星の藻屑となる今、するべきことではないぞ。」

「彼女は父上の最愛の人、『ラヴさん』との子ですよ!?忘れたとは言わせません。あんなに会いたがっていたではありませんかっ。」

「ラヴ…会いたいな。もう会うことはできない、今世も、来世も。」

その言葉が言い終わると同時に、窓から光が入り、父上の顔が鮮明に見えた。

私と似た切長の目には、涙が浮かんでいた。

「マヤああ！」

ミシェルが心の底から叫ぶ。

「父上はもう、王の洗脳に染まってお前のことは忘れてしまった。だから、もう、ここで。」

「やだ！私はミシェルと一緒に死にたい！」

「だめだっ。おれは父上たちと一緒に死ななければいけない。そうしなければ、みんなの転生後のせが保証できなくなる。そして、父上はお前を連れて行かないだろう。父上にとってはお前は『ただの奉公人』なのだからな…。」

「ちょっと、待って！ミシェル！父上…！」

父上は首にかけたペンダントを掲げた。

「我、星とともに生き星とともに宙の藻屑となる者、星の祭壇へ移動し給え。」

ミシェルが何か言おうとしていたが、それが発せられる前に光があたりに充満した。

おさまったと思えばミシェルと父上は、もう、消えていた。

「ミシェル、気づいてないの…？私も『王族』の血を引いてるんだよ、この意味がわからない…？」

足に力が入らなくて、その場に座り込んだ。

「私もみんなと一緒に死なないと。このままじゃ、みんな、転生後の幸せが約束されないじゃないのっ…。」

星が死ぬまで、あと1時間。

気がついたら、私は誰もいないダイナスティー邸のいろんな部屋を徘徊していた。生活の跡をみて、ミシェルや父上の幸せそうな姿を想像する。もう少し早く出会っていれば、私もこの幸せの中にいたのかな。とぼとぼ歩いていると、おそらくミシェルの部屋に着いた。

「ミシェルのにおい…もう会えないのかな。」

ここからその星の祭壇とやらの場所の距離がわからない。
おそらくそこでスターダストの教えの信者たちは死ぬ。そして星も死ぬ。私が行かないとみんなの最期が無駄になる。でも、外に出る気力がなかった。

部屋をキョロキョロ見回していると、壁に地図があることに気がつき、近づいてみてみた。

「この距離なら、間に合うかも。でも、もう走る気力なんてない。」

ミシェルたちの幸せのことを考えたら、私が行かなければならない。
でも、そこまで『教え』に執着する意味は？

「ん？紙が置いてある…。なんだろう。」

机の上には一枚の手紙のようなものが置いてあった。それには丁寧な字の文章が書かれていた。勝手に読むのは忍びない。でも最期くらい、と思って目を通した。

ミシェル。余はまもなく自我が薄まる。この星の君主の弟として、スターダストの教えを伝承していく者の一人として、清い気持ちで最期を迎えるため兄がそう仕向けるからだ。
明日我が家に…以前話したように、お前の妹にあたる『マヤ』という愛しい我が娘が奉公人として来る。余の最期の願いは、彼女に会うことだ。しかし、自我が薄まっていたら、余はマヤのことを忘れてしまうだろう。
だから、もしマヤが来る前に余の自我が薄まってしまったら、こう伝えて欲しい。

君と、君の母親を、星が死ぬ最後の1秒まで、愛している。

よろしく頼んだ。

「っ……！」

最後の1文を読まずに手紙をクシャクシャに握りしめ部屋から飛び出した。

休まず、時々つまずきながらも、全力で。

ミシェル、あなたは消える前何か言おうとしていた。それって、あの手紙のことだったんだね。でもよかった。こんなことになっちゃったけど私は知ることができた。父上は私のことも愛してるけど、それより私の母ラヴのことが忘れられなくて、最期に、会いたかったんだ。私は母と瓜二つだから。

なんでこんな残酷な運命なのだろう。

父上は最愛の人に、最期まで会うことはできなかった。

その代わりミシェルは私から最期に『感情』をもらった。

その感情って、なんだろう。

曖昧なままだ。

でも、きっと、父上と同じ気持ちなのだろう。

私も ――――――――――――――――

「マヤ」

ん、ここはどこ？

「マヤ、起きろ。」

ミシェル…？

「先に死ぬな…お願いだ…。」

声だけが聞こえる。

「おれはお前と死にたいのに。」

多分、今、ミシェルに抱えられてる。歩きながら。

「ここまで来てくれて、ありがとう。」

ああ、そっか。星の祭壇まで着いたんだね。

「まだ心臓がか弱く動いている。おれの声が聞こえているか？」

うん、聞こえてるよ。

「ははっ…。最初からおれたちはみんなより先に死ねばよかったのだ。そうすれば、洗脳済みのみんなは来世、幸せになれた。」

そんなこと言わないでよ。

「きっとお前なら、そんなこと言わないでというだろうな。」

一瞬頬のあたりになにかが落ちた音がした。

「お前ともっと過ごしたかった。お前の話をもっと聞きたかった。」

私も、ミシェルの話、聞きたかった。

しばらく無言が続く。

遠くから、爆発音が聞こえた。

「もう、終焉だ。」

残り

5秒

「父上も、かわいそうだったな。」

4
秒

「まあ、おれたちも、かわいそうだ。」

3
秒

「来世で会えるといいな。」

2
秒

「ありがとう、マヤ。」

1
秒

「おれも、最後の1秒まで、きみが好きでした。」